

## 折々の歌 2

— 詩歌指導の一つの試みとして —

国語科 島村 潤一郎

四月から二月まで、その季節に見合った短歌・俳句の類を授業の最初数分を使って紹介するという授業を行った。前任校である中央高校の研究紀要にその前半を載せたが、今回の原稿はその続編である。

キーワード：国語 詩歌指導

A：どーも。

B：どーも

A：また、ですねえ。

B：そうですねえ。「折々の歌」を前任校金沢中央高校の研究紀要に載せたのが平成四年。何とそれから二十二年の歳月が流れてしまいました。

A：これはどういうことなんでしょうか。

B：中央高校の横に准看の学校があって、そこで四月から九月まで講師として現代文の授業を担当することになったというのがそもそもの発端だったんです。ただ授業をするんじゃ面白くないというんで生まれたのが、授業の頭にその季節季節に見合った短歌俳句の類を紹介していこうという企画。それをまとめたのが平成四年の研究紀要。十月以降もやればいいじゃないかと拡大したわけで、ネタはある程度かなり早い段階で出来上がっていたんですが、読書指導や「名言で語る世界史」のシリーズがそのうち始まって、お蔵入りすることになってしまっていたネタです。

B：それが引っ張り出されてきたわけですね。

A：平成8年にこの学校の紀要に載せた「超時空歌合わせ」の原稿と若干かぶるところもありますが、そのあたりはご容赦を。

九月

天上影は変わらねど榮枯は移る世の姿

土井晩翠 「荒城の月」

今夜鄜州の月 閨中独り看るらん

杜甫 「月夜」

B：仲秋の名月とかいうんで、夜空を眺めることの多い季節のようです。九月はそういった歌を特集してみました。

さて、題は夜空ですが、星、月というものには、何やら人を感傷的にしてしまうところがあるようです。昔の人もこうしたものにそうした想いを持ち続けてきたようで、実際に過去から現在まで、これを一つのモチーフとして数多くの詩歌が作られてきました。ここではそうした作品を二つにパターンにわけて見てみたいと思います。

星、月といった大きく恒久な存在を前にして、人は有限かつ無常なる人間の姿に想いを至らせる。また一方で、この地上をくまなく照らしたす孤独な天体の微光が、人をして遥かな遠くの場所へと想いを馳せさせる。月や星が、今と過去、ここと彼方、遠く時空を隔てた二つのものを媒介し、一つの心象の中へ結びつけるわけです。これを仮に時間型と空間型というふうに分けておきたいと思

います。上に掲げた作品では「荒城の月」が時間型、「月夜」が空間型になると思いますが、こうした定型を踏まえた作品は結構たくさんあります。前者では、伊勢物語の「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」、後者では五木ひろしの「夜空」（あの娘どこにいるのやら 星空の続くあの街あたりか）、井上陽水の「東へ西へ」（満月空に満月 明日は愛しいあの子に会える）などが思いつきます。両者の複合型としては、阿倍仲麻呂の「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」などが挙げられるでしょうか。

闇の世は吉原ばかり月夜哉

其角

B：月に関するものをもう少し続けたいと思います。今回の句は、私が今まで出会った句で最も感動した五七五です。

A：ほほう。

B：と言っても描かれている情景が感動的っていうのは少し違うんですよ。俳句っていうのは五七五、十七文字しかない。なのにわずか十七文字でこれだけのことができるんだ、そこに感動したわけです。ところで、ルヴィンの壺という初歩的なだまし絵をご存じでしょうか。

A：壺に見えたり、向き合った二人の人間の顔に見えたりというやつですね。

B：この句も見方を変えてみると、浮かび上がってくる情景が全く異なったものになるというそういう句なんです。まずこういうふうに切ってみたいと思います。「闇の世は／吉原ばかり月夜哉」当時の最大の夜間照明は月の光といわれるほど、江戸の夜は暗かったといえます。「闇の夜」で月が出てないわけですから、江戸の町は闇に沈んでいます。しかしあたかも満月の夜のようにこうこう

と明かりのともされている一角がある。それが歓楽街「吉原」です。

さあ次はこういうふうに切ってみたいと思います。「闇の世は吉原ばかり／月夜哉」大勢の人で賑わっている歓楽街「吉原」ですが、苦界という言葉もあるように所詮、虚飾の世界です。「吉原なんて所詮闇の世界じゃないか。そんなことを思わせる月夜であることだよ」……つまり読み方、見方を変えることによって、明るく賑わう吉原が闇に沈み、逆に市井の人々がつつましく生活する江戸の町が月の光の中に浮かび上がる。ちょうどネガとポジが逆転するんですね。

A：それでルヴィンの壺の話をしたんですね。確かに面白い句ですね。

B：でしょう。

糸瓜咲て痰のつまりし仏かな

正岡子規

B：私の友人で面白いことを言った人間がいました。明治から昭和初期の日本文学を語る上で欠かせない立役者がいると。

A：誰ですか。

B：それがね、友人は言うわけですよ、結核菌だと。

A：結核菌？

B：当時の結核はある意味現在の癌より怖い病気だったと言われていました。

A：死に至る病だったわけですよ。

B：患者は己の死を意識せざるを得ない。そこで生徒に言うんです。己の死に向き合うことは己の生に向き合うことだと。そうした中から生まれてきた文学作品が数多くあるのだと。

A：それでこの正岡子規の辞世の句になるわけですね。

B：正岡子規の意識は最期まではっきりしていたよ

うです。糸瓜の花が咲き誇る中、刻々と死に近づいてゆく己自身を突き放すような形で「仏」と子規は表現したわけです。

A：いわゆる一つの客観写生というやつですね。

B：これにからめた形で「病床六尺」の中の言葉を私は生徒に紹介しています。ご存じのように子規の病気は脊椎カリエスです。七転八倒するような痛みが彼を襲うわけです。そんな中で彼は平然とこういうことを書いているんですね。「余は今迄禅宗の所謂悟りという事を誤解して居た。悟りという事は如何なる場合でも平気で死ぬることだと思っていたのは間違いで、悟りという事は如何なる場合でも平気で生きていることだった」

A：なかなか深くて重い言葉ですね。

## 十月

有明や浅間の霧が膳を這ふ

小林一茶

B：これは高校時代国語の便覧を読んでいて出会った句ですが、極めて切り詰められた無駄のない表現で的確に情景を描写してみせた見事な句だと思います。まず「有明」で時間帯が設定される。西の空にまだ有明の月が残っている。早朝です。次に「浅間」で場所がわかる。一茶が江戸から故郷の信州に戻る時、浅間山の近くに宿をとったわけですけど、その時の句です。次に「霧」で季節がわかる。秋です。当時の旅人は早起きです。夜になったら暗くてもう動けないわけですから、お日様の出ている時間を最大限利用しようとする。日の出とともに出発です。ですから、まだ暗いうちに起き出してきて、東の空が白々としてくる頃に朝食の膳に向かう。山間の土地で早朝という時間帯ですから、霧がたちこめている。朝食の膳に向かって一茶の膝頭のあたりにぬうっと霧が流

れてくる。その動感を「這ふ」という語で一茶は表現したわけです。今、一茶の目の前にあるのは小さな朝食の膳、しかし漂ってくる霧の向こう側には見えないけれども、巨大な浅間山が聳え立っている。ここには小と大の対比があるわけです。そういう句は他にもあります。「雀の子そこのけそこのけお馬が通る」なんていうのはよく知られたものです。これは雀と馬といったレベルの対比でしかありませんが、「蟻の径雲の峰より続きけん」、「蝸牛そろそろのほれ富士の山」、これらは極小と極大と言ってもいい対比なんじゃないかと思えます。

今日からは日本の雁ぞ楽に寝よ

小林一茶

B：大学時代は夏休みとか春休みとか、1ヶ月近く日本を離れ、アジアやヨーロッパを旅するということが結構ありました。長旅を終えて、到着ゲートに降りたって、いつも思い浮かべる俳句がありました。それがこの一茶の句です。この句は国際空港の到着ロビーに掲げるといいんじゃないかとも私は思っています。何か私には目に浮かぶようなんですね。穏やかな秋の日、信州の田んぼの畦道で、老一茶が暮れなずむ西の空を見上げている。隊列をつくって飛んでくる雁の姿が目映る。長旅、お疲れ様、しかし、おまえさんたちも今日からは日本の雁だ、この地でゆっくり休んでいってくれ。そんな思いで老一茶は目を細めている。そうした小さな生き物への温かなまなざし。それが一茶の句を特徴づけているのではないかと思います。

A：そのあたりのことに関しては一茶の生い立ちが関係しているのではないかという話がありますよね。

B：幼い時に実母と死に別れ、その後継母がやって

くるんですけど、そりが合わず、十五ぐらいで江戸に出て苦労を重ねる。晩年、故郷に戻ってきて若い女と結婚して子供も生まれ、幸せな日々が続くのですが、病で妻も子供も死んでしまう。苦労人としての人生が彼に弱者へのいたわりに満ちたまなざしというものを与えたのではないかと思います。

A：確かに一茶の句の特徴としてそれは言えるかもしれませんがね。「やせ蛙負けるな一茶これにあり」「我と来て遊べや親のない雀」、いろいろありますからね

夕焼け小焼けだ

大漁だ

大場鯛の

大漁だ

浜は祭りの

ようだけど

海の中では

何万の

鯛の用い

するだろう

金子みすず

B：一茶に近いものを持っている童謡詩人ということで、金子みすずを次に持ってきてみました。この人の詩にも小動物がよく登場するんですね。

A：ちなみにこの詩は200字作文があった頃、東大の入試問題に出題されたこともありますね。

B：この詩を紹介する時、私がよく言うのはこれです。詩というのは言葉の意味も確かに重要だけど、言葉の響きもそれと同じくらい重要だということです。だってより多くの人に長く口ずさんでもらってなんぼ、の世界ですからね。まず第一連を見てください。「——だ」が繰り返されています。歯切れのよいリズムが生まれているわけですが、

三行目だけが韻を踏んでいない。

A：漢詩でもこういうことってありますよね。

B：フランスのソネットにおいてもまた然りです。何を言いたいかという、洋の東西を問わない一つのパターンのようなんですね。四つ並んでいる場合、三つ目をちょっと他の三つから外す。そうすることによって微妙なバランス感が生まれるようです。

A：そう言えば起承転結というものもありますね。

B：それから第二連にも注目してもらいたと思います。第二連もうまいと思います。俳句に配合という技法があるんですけど、それと同じ技法が使われています。

A：配合というのは？

B：簡単に言うと、コントラストということです。俳句というのはわずか十七文字しかない。それだけの字数でどれだけ鮮やかに情景を浮かび上がらせることができるか、そこが勝負ということになるわけです。ですから、十七文字の中に対比を持ちこむということを俳句の詠み手はよくやります。ここまでで紹介した句で言うと、「糸瓜咲て」と「仏」、ここには生と死の対比があるわけです。一茶の句のところでも極小と極大の対比というような話をしたいと思います。この配合の話をする時に私がよく引き合いに出す句があります。寺山修司の句です。「便所より青空見えて啄木忌」これが仮に「茶の間より青空見えて啄木忌」だとか「教室より青空見えて啄木忌」だったら、どういう感じになる？と生徒に訊いてみます。

A：青空の青がちょっとぼけてしまうような気がしますね。

B：そうですね。便所の窓ってそんな大きくないですよ。そしてほしい便所というのはそんなに明るくない。そういう場所から見上げる青空だからこそ、くりぬかれたような青空の青が目染みるように感じられるんですね。そして金子みす

ずの詩にも明と暗の対比があります。

A：「祭り」と「弔い」ですね。

B：実にうまいと思います。まず先に人間の視点から大漁を描く。大漁というのは人間にとってめでたいことです。そこから視点をぼーんと海の中に切り替える。鱒の視点に立って言うと、大勢の仲間を失ったことになるわけですからこれは悲しいことになるのですが、「祭り」という言葉がその前にあるが故の効果というのがここにはあるんだと思います。行間からふっとたちのぼってくるえもいわれぬ惻々とした寂しさ。これは他になかなか類を見ないものだと私は考えています。

A：自死で終わる幸薄き彼女の短い人生に思いを馳せると、なおのこと、そういった寂しさが身に迫ってきますね。

B：そうですね。

親思ふ心にまさる親心

今日のおとづれ何と聞くらむ

吉田松陰

今にして知りてかなしむ父母の

我にしまししその片思い

窪田空穂

A：さて、親と子ですか。

B：10月27日が吉田松陰の命日なので、このあたりに持ってきました。安政の大獄で処刑されることとなった松陰が死の間に詠んだ辞世の句の一つです。最大の親不孝は子供が親より先に死ぬこととよく言いますが、いよいよ自分は刑死の日を迎えることとなったが、その日の到来を親は今頃どういう思いで受け止めていることであろうかと詠んだものです。後者の歌の方に関しては、いろいろ思い出深いものがあるので、お時間を頂戴したいと思います。

あれは忘れもしない、大学四年の春のことです。田舎に帰るつもりもないし、国語教師になる気もないんで、敢えて単位を落とし留年の道を選んだんですね。で、スペインのコルドバの電話局から親に電話して言ったんですね。「あ、わりー。大学卒業できんがなったわ。教員採用試験の件だけど、そっちの方で適当に断っておいて」、がちゃん。

A：それはひどいですね。

B：当時教職員課にいらっしゃった高校時代の恩師で後にI高校の校長先生におなりになったS村K了先生にも「だらなことしくさって。前代未聞やぞ」と言われました。この場を借りて改めてお詫び申し上げます。

A：教員生活のスタート時点からゴーイング・マイ・ウェイだったわけですね。

B：いや、それ以前からです。

A：で、結局、何で金沢に帰ってくることにしたんですか。

B：忘れもしない、あれは1988年7月24日、その前日石川県で教員採用試験受けて、夜行で東京に戻り、東京都の教員採用試験を受けたんですね。1時から制限時間90分で三つ目の試験が始まりました。で、私、60分で答案、書いてしまったんですね。まあ何しろ、その前年、メキシコから試験の二日前に日本に帰ってきて、それでA採用という人間ですからね。ははは。最近、「塾へ行かないと、だらけて勉強できない」とか言う高校生がいますけど、私なんか「何なんだろう」って思っちゃいますね。その気になればメキシコにいたって勉強はできるんですよ。教採受かるんです。で、話を東京都の採用試験に戻すと、こちからは完全にもう終わってるのにみんなまだカリカリ答案を書いている。こんなの、60分で十分じゃないかと思っていたんです。で、2時半にベルが鳴った。試験官が言うんですね。「はい、そこまで」 ああ

終わった終わったと思って答案を裏返してみると  
……

A：問題が裏まで続いていたと……

B：つまり、その試験会場における一番の馬鹿は自分自身だったというわけですよ。で、その時思っ  
たんですね。「駄目だ、こりゃ。」

A：で、金沢に帰ってきたと。

B：だってそうじゃないですか。確かに私、抜け作  
ですよ。でも小中高大とどれだけ試験受けてきた  
と思います。そんな初歩的なミスやらかしたこと  
なんて一度もない。なのによりによって東京都の  
教員採用試験に限ってそういうミスをやらかして  
しまう。何か見えない大きな力が私を金沢に引き  
戻そうとしている。そういうふうに関念して金沢  
に帰ってきた次第です。で、そんな時、我が母君  
が私に教えてくださった歌が窪田空穂のこの歌な  
んです。で、何を言うかというとおっしゃるん  
ですね。「おまえは自分のこと心配せんでいいと言  
うけど、親というのはそういうもんなんや。親の  
気持ちは親にならんとわからん。おまえも早く親  
になれ。私の言うことがわかる」その時はうる  
さいな一と思っていたんですけど、今にして本当  
に思いますね。私が母親から教わった最大のことは  
これだなあって。「親の気持ちは親にならんと  
わからん」と。

A：で、「今にして知りてかなしむ父母の我にしま  
ししその片思い」ですか。

B：ちなみに「続・マーフィーの法則」という本の  
中にこういうのが載っています。私は片思いの法  
則と呼んでいます。「人を愛している時は、どん  
なひどい仕打ちを受けても許してしまう。愛され  
ている側は知らず知らずのうちにひどい仕打ちを  
してしまう。」

A：要するに「惚れた弱み」というやつですね。

B：「恋愛において強いのは男だ、いや女だ」とい  
うような議論がよくなされがちなんです話単

純なんですね。先に惚れてしまった方が弱い立場  
に立たされる、そういうものなんです。子供だっ  
て親のことを思っていないわけじゃないんですけ  
ど、親の子供に対する思いに比べれば、これは片  
思いみたいなものなんですね。

あと、窪田空穂には子供のことを詠んだこうい  
う歌もあります。「親心愚かしくして必ずや生き  
て帰ると頼みたりしを」これはシベリア抑留で亡  
くなった次男のことを詠んだものです。

## 十一月

海に出て木枯らし帰るところなし

山口誓子

B：この季節になると、シベリア大陸の方から冷た  
い季節風が吹いてきて木々を少しずつ裸の状態に  
していきます。はるか海を越えやってきた木枯ら  
しは野を吹き抜け、山を吹き抜け、町を吹き抜け、  
再び海に出るが、どこまで言ってもおまえさんた  
ちには帰るところがないんだね、さぞや寒かろう、  
寂しかろう……そういうふうはこの句を受け止め  
てもいいんですが、背景にあるものを押さえて見  
返すとまた哀切極まりないものが浮かび上がって  
きます。授業では、「木枯らし」はいったい何を  
意味しているか、考えてみよう。そういった問題  
も出しています。と言ってもノーヒントではあま  
りに難しいのでヒントを出しています。この句は  
昭和19年の11月に詠まれたものなんですね。

A：戦争に関係ありそうですね。

B：はい、そうです。それでもわからないようであ  
れば、「木枯らし」って「風」ですよというヒント  
も出したりします。

A：それでわかりました。「カミカゼ特攻隊」のこ  
とを詠ったものですね。

B：そうなんです。最初の特攻隊が飛び立ったのが

19年の秋。行き燃料だけを積み、海に出たまま二度と戻らなかった若者があの時代大勢いました。そうした若者に対する鎮魂の句がこれなんです。

A：そういうのを踏まえて口ずさみ直すと、確かにやはり迫ってくるものが違いますね。

マッチ擦るつかのま海に霧ふかし  
身捨つるほどの祖国はありや

寺山修司

B：これは「祖国喪失」と題された一連の歌の冒頭に来る作品です。上の句で情景を描写しておいて、下の句でそういった情景の中に身を置く詠み手の心情が描写されるというのはよくあるパターンですが、この句において上の句は詠み手の心象風景にもなっているという言い方もできますと思います。

A：寺山修司の心にも深い霧がたちこめているということなののでしょうか。

B：だと思います。これに関しては、昭和10年の生まれだということと関係しているのではという見方もあるようです。十才の年の八月に彼は価値の大転換を経験してるんですね。それまでは大きくなったら兵隊さんになって天皇陛下のために命を捧げるのだと教えられてきたのに、すべてがひっくり返ってしまった。教科書のここからここへ墨を塗りましょう、これからはアメリカ式の民主主義でいきましょうとかいう具合になってしまった。この間まで鬼畜米英とか言ってたおまえたち大人は何なんだ、嘘つきじゃないかということになりますよね。つまり寺山は戦前戦中の日本にも帰属意識を見いだすこともできないし、態度を豹変させた大人たちが何食わぬ顔で幅をきかせている戦後の日本にも違和感を感じずにはいられない。彼のアイデンティティはその狭間で宙吊りになって

いるわけです。さらに話を展開させるならば、国家というものに対する不信感というのはこの世代に共通する一つの特徴のように思われます。集団的自衛権の問題で賛成・反対の意見がテレビなんかで取り上げられるんですけど、反対意見の方で登場する識者の代表がだいたいこの世代の人なんです。これが満州からの引き上げ経験者となると、その不信感はより根深いものとなるようです。国民を守らねばならない軍隊が国民を置き去りにして真っ先に逃げたっていうんですね。

B：そういう世代の人にしてみれば、自分たちの世代が今声をあげずに誰があげるといふ思いがあるんでしょうね。

A：だと思います。

咳をしても一人

尾崎放哉

B：中学校時代、年配の国語の先生が言ってたんですね。「咳をしても一人……いいですねえ……」けど中学生だった自分は全然理解できなかった。けど今読み返してみると別の意味で無性にいいんですね。これは宮沢章夫が書いているんですけど、ちょっといくつか作品を並べてみたいと思います。

いつも来ては糞をする隣の鶏

本気で鶏を叱っている

爪を切った指が十本ある

A：うーん……わかりませんねえ……。何なんでしょう？

B：そうですね。「どこが俳句やねん！」と思わずつつこみを入れてしまいたくなるついていけなさが無性にいいんですね。

A：何かシュールですよ。

B：けど、そこから浮かび上がってくるものがあり

ます。

A：何ですか。

B：それに関して答える前に尾崎放哉の半生について触れておきたいと思います。東京帝国大学の出身ですが、いくらか圭角のある人間だったようです。仕事につくんですが、人間関係がうまくいかずドロップアウト、晩年は寺の堂守りをしながら句を作り続けます。さっきの問いに答えておきましょう。浮かび上がってくるもの、それは必ず「孤独」です。要するに、友達がいない。話し相手がいない。それで鶏相手にぶつぶつやっている。爪を切った指をただ眺めている。

A：無茶苦茶、寂しいやつですね。

B：そうなんです。この句を通して生徒に語っているのはこういうことです。尾崎放哉みたいに世の中のあれやこれや煩わしいことを断ち切って自由に生きることに人は憧れるかもしれない、けどその先には大なり小なり孤独が待ち受けていることを人は覚悟しなければならない、

A：自由と孤独というのは背中合わせになってるってことですね。

疎くなる人を何とて恨むらむ

知られず知らぬ折もありしに

西行

B：「恋人にとって愛する相手とは世界の透明性だ」というのはバタイユの至言ですけど、ここにはそうした世界の透明性を喪失した人間の憂悶と呻吟が実に端的に表れていると思います。「遠ざかりゆくあの人のことをどうして私は恨んだりするのだろう。私があの人に知られず、あの人が私のことを見知らぬ折もあったというのに（二人は出会わなかったと思えばいいのだ）」と理性の上では理詰めに未練を断ち切ろうと自らに言い聞かせているのですが、いかんせん、恋という感情はそんな聞き分けのいいものじゃない。

な聞き分けのいいものじゃない。

A：「恋愛は戦争に似ている。始めるのはたやすいが、終わらせるのは容易ではない」という言葉が誰だったかの言葉にありましたね。

B：私の知った人間でこういうやつがいますね。高校時代、部活の後輩といろいろあったんだけど、東京の大学に行ってもうまくいかなかった。それで九月母校の文化祭に戻って映画の上映会をやっていると、その女がひょこっと現れてにやにや笑いながら言うんですね。「先輩、びっくりするものを見せてあげる」で、何だろうと思っていると、あろうことか、新しい男を私の前に連れて来やがるんですね。私のいない間に、金大行った男とつきあい始めてやがんの。それも私の小学校時代からの友人と！あてつけがましく見せびらかしに来やがんの！

A：あれ、知人の話なんじゃなかったでしたっけ？

B：……………。

A：……………。

B：あはははは、そうそう、そうですよ。知人の話です。あくまでも知人の話、知人の話。けど、思いませんか。ヤな女だよなー。

A：むっちゃ性格悪いですよ。

B：でしょでしょでしょ。

A：何か異様に力、入ってません？

B：いやー、別にそんなことないですよ。

A：でもその時、どどーんと落ち込みまくっていると、「先輩の映画見てファンになりました。サインしてください」と二つ下の後輩がやってきたと。それが現在の女房だと。

B：まあ、「捨てる神あれば捨合う神あり」ってところですね。けど、先の女との話には後日談がまだあるんです。

(後日談、延々と続く。長いので省略。)



B：で、ある時、その女から誕生日祝いのメールが届いたんです。で、そこに書いてあったんですよ。「貴方のように聡明で、ユーモア・センスのある男性と出会えたことを私は誇りに思います」と。

A：性格の悪い女もそれだけ大人になったんですね。

B：で、その時、そいつは思ったんですよ。「あの女には随分振り回されたし、煮え湯も飲まされた。けどあいつとの出会いがなければ、自分の青春はどれだけ彩りに乏しいものになっていたであろうか」と。ちなみに「人生とは何ぞや。五文字以内でまとめなさい」というがあったら、どう答えます？

A：五文字ですか。

B：そいつは言うんですね。「出会うこと」だと。「知らない世界と出会うこと。自分の知らない自分と出会うこと。そしてこの人との出会いがなければ、自分の人生はどれだけ彩りに欠けたものになっていたであろうか」という出会い、それらの集積が人生なんだと。」

A：恩讐を超えて、そういう理解に達したわけですね。

B：まあ、そういうことですかね。

A：女の方も男の方も大人になるのに時間がかかったということですね。

B：ははは、まあそういう結論になりますかね。

## 十二月

長らへばまたこの頃やしのばれむ  
憂しと見し世ぞ今は恋しき

藤原清輔

そんな時代も あったねと  
いつか話せる 日が来るわ  
あんな時代も あったねと

きっと笑って 話せるわ  
だから今日は くよくよしないで  
今日の風に 吹かれましょう

中島みゆき 「時代」

A：さて今回の歌は百人一首にもとりあげられていて、一般にも馴染みの深いものですね。それと中島みゆき。

B：知人に言わせると「時代」は例の女との思い出にもつながる歌なんだそうです。大学時代、一旦よりがもどりかかることがあって、向こうが東京の下宿に遊びに来た時、この曲をかけながら「そう言えばあんなこともあったね」と二人で思い出話に耽った思い出があるんだそうです。それとやはりこの歌を持ってきたのは何かと言うと、この「超時空歌合わせ」という企画を考えついた時、真っ先に思い浮かんだのがこの組み合わせだったというのがあります。やはりやらないわけにはいかないなど。

A：確かに千年の時間を隔てていますが、両作品とも、「どれだけ辛いと思うことがあっても、やがてそれが懐かしくしのばれる日がきっと来る」とうたっていて、そのあたりは全く変わりがありませんね。

B：そうなんです。時間というものが苦しみ、哀しみを思い出として美しく結晶化させる、そのあたりの描かれ方が全く相似形なんです。それで、こういうような面白い組み合わせが他にもないかってことになって、どんどんこの企画の内容がふくれあがっていったわけです。そういう意味で一つのとっかかりともなった作品です。内容は今、指摘してもらったとおりなんです。このあたり、私たちにこの辛い一日を乗り越える勇気を与えてくれるようなところがあって、いいものだと感じさせるものがあります。ちなみに、中島みゆきのコンサートへ行った時、彼女が面白いことを

言ってたので、つけ加えておきます。言うんですよね、彼女、「私、本当言うと、音楽よりもずっと好きなものがあるのよね」そこで、私はえっと思った。音楽をやっている人間がそれよりもずっと好きなものがあるって言うんですからね。そしたらね、彼女はこういうふうにしたわけですよ。「私、言葉ってやつが好きなの。考えてみたら、言葉ってのは、本当に不思議なものよね。言葉というのは実体を伴わない。けれど、時として言葉はどんなナイフよりも深く人の心を傷つける。けれども、どんな薬によっても癒すことのできない心の傷を癒すのもまた言葉なんだ」と。で、私は思ったわけですよ。詩というのは、要するに、読むクスリなんじゃないかと。私にも身に覚えがあるからよくわかるんですけど、優れた詩というのはそういうふうな効用を持つんですよね。それをちょっと口ずさむことによって、ふっと心の荷物が軽くなったり、気持ちが楽になったり、また嬉しい時だとより一層その喜びがかみしめられたりだとか、そんなことがもうたくさんあるわけですよ。そうした優れた詩句を持っていないのと、多く持っているのでは、ちょっと大げさな話ですが、人生と言うか、その味わい方そのものが大きく違ってくるような気さえます。彼ら彼女ら生徒たちもこれから大人になって様々な感情生活を体験するわけですが、その局面局面においてその想いを見事に代弁する詩句がきちんと先人によって用意されているわけですし、それを多く自分の中に持つ者こそがその感情生活をより深く、より豊かに、より濃密に生きることができる、そんな気がすごくしますね。というようなことで紹介したい詩がどんどんふくれあがって行って、この企画になったってところあります。

冬眠 ●

草野心平

A：さて、冬休みですね。

B：冬休み前ということで、例年、世界で一番短い詩をここで紹介しています。

A：●一つで「冬眠」ですか。これはある意味、コロンプスの卵ですね。

B：最初に考えた草野心平がすごい。こんなのありなんだから追従者が安易にやっても白けてしまう。昔、東大入試の第2問で200字作文というのがありました。それを意識して折々の歌を一通りやり終えた後で生徒に作文を書かせるということをやっています。一つ作品を紹介しておこうと思います。

冬眠 ●

寒い冬の朝。一人の村人が山に薪を取りに向かう。静寂。あたりは一面銀世界。自分の残した足跡と白い息が浮かぶ。暗い木々。そこで村人は黒く小さな生命の門を見つけた。そんな風景が私の目の前に浮かんできた。一目見れば吹き出してまいそうな詩。でもそれに私は生命の静かな迫力とあたたかみのあるユーモアを感じた。中で眠る生物たちのぬくもりのような。なんだかとてもうれしかった。

A：いいですね。●が一つ。そこからこれだけイメージネーションを広げることができる。そこがすごい。

B：この学校に来て学んだことがあります。ペーパーテストと詩心というのは全く別ということですよ。ペーパーテストはぱっとしないんだけど、この手の文章を書かせると、実にいいものを書いてくる生徒がいる。逆にこういうのもいます。昔、短歌、俳句を作らせるという試みをやったことがあるんですけど、忘れもしない、「スペクター日本語うまい秋の夜」なんていうのを平気で出してくるのがいる。

A：何なんですか、それは。そんなんだったら、いくらでもできるじゃないですか。「ウィッキーさん日本語うまい冬の朝」だとか「オロゴンさん日本語うまい春の宵」だとか。

B：でしょう。そんなのが現役で超一流大学に入っ  
て、今じゃ大学の准教授だったりするわけですよ。

A：わからんもんですな。

B：さてこの後一月二月とこのシリーズ続けたんですが、それはまた機会があったらということにしたいと思います。

A：パート3をやるということですか。

B：わかりませんね。現在のところ、流動的ですね。

A：では。

B：では。アリアリアリアリアリアリーヴェ・デルチ！（さよならだ。）